

Forex

株式会社 ジャパン
エコノミックパルス

〒103-0007

東京都中央区日本橋浜町

2-33-5

Tel 03-5962-3910

Fax 03-5962-3913

www.j-pulse.co.jp

info@j-pulse.info

Market Insight

2026年10月5日（月）

全般ドル高とクロス円の円高の綱引き

世界国債不安、米欧日の中銀政策、円安対応など焦点

今週の為替相場は全般的なドル高と、クロス円取引（円の対非ドル通貨相場）での円高との綱引きとなる。週間予想はドル/円が156.30-159.30円、ユーロ/円が174.50-178.80円。前週は米国の経済指標が強弱混在となったものの、基本的な前向き見通しが維持されたことや、米国債金利の高止まりなどでドルがサポートされた。一方でフランスの政治・財政不安などでユーロ安、豪州中銀の利上げ強化観測の緩和で豪ドル安などが見られている。今週は世界的な国債不安や、米欧日の中銀政策、日本の当局の円安対応などが焦点になる。

クロス円、対円で底堅い通貨と下落の通貨が混在

今週の為替相場で注目されるのは、世界的な国債不安の動向だ（国債価格は下落で金利は上昇）。中東混迷の持続等による資源エネルギー価格の高止まりとインフレ上昇懸念、世界的なAI・データセンター・半導体関連等での需要の強さと関連価格の上昇、AI関連企業等による社債発行の増加（債券市場全体が供給過多に）、各国でのポピュリズムと財政不安などが、国債金利の上昇を促している。

前週にかけては来春に大統領選を控えたフランス（仏）での極右候補の支持率優勢や、同国の財政悪化、インフレ率上昇などにより、仏国債の下落とユーロ安が後押しされた。前週段階ではユーロ安・ドル高と、ユーロ安・円高が同時観測されている。

米国でも米国債価格の下落と金利の上昇が続いているが、前週段階では対円以外の通貨に対してのドル高と、ドル/円での「ドルの上値は重いが下値も限定的」という展開が見られていた。ドルのサポート要因としては、AI・データセンター特需などを受けた米国景気の底堅さや、直近の米物価指標での過度なインフレ上昇の抑制、世界的な資源・商品相場上昇の中で、米国は資源・農産物の産出・輸出国という強みなどがある。

今週以降、米国債金利の高止まりが続くと、全般ドル高とドル/円でのドル底堅さ、クロス円での円高・非ドル通貨安（対ドルでの非ドル通貨安が伝播）が注視される。

反対に米国債金利が調整的な低下となる局面では、全般ドル安と、ドル/円でもドル安となるケースが無視できない。調整ドル安の場合、クロス円取引はドル安・非ドル高を受けて、対円で非ドルが連れ高となるか（円安）。あるいはドル/円でのドル安・円高により、クロス円にも円高が波及（非ドル安）するかの見極めとなる。

今週の為替相場で注目されるのは、クロス円取引（円の対非ドル通貨相場）の動向だ。前週にかけては非ドル通貨安・円高が進展となっているが、背景としてはドル高・非ドル安の余波や、仏政治・財政不安等によるユーロ安、豪州中銀の利上げ強化観測の後退による豪ドル安などの影響がある。同時に日米の政治的・政策的な円安是正協調の強化や、日銀の利上げペース加速観測なども、円高・非ドル通貨安を後押しさせている。

一方でクロス円では現在もなお、外貨高・円安が維持されたり、外貨安・円高

WARNING! 記事並びに情報はすべて株式会社ジャパン
エコノミックパルスに帰属しています。無断転載及び転送
は法的に罰せられますのでご注意ください。



〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町2-33-5 マリオン浜町ビル
TEL (03) 5962-3910 FAX (03) 5962-3913
E-Mail info@j-pulse.co.jp URL http://www.j-pulse.co.jp
発行責任者：上坂 郁 編集長：原田 祥二

が抑制されている通貨も少なくない。背景としては基本的な「構造円安」の残存や、日本の金利の海外比での低位持続、ドル/円での円高抑制の余波、国内勢による海外の債券・株式等への資金流出持続などがある。

直近の全般円安と外貨高のピークである9月18日以降、10月5日のアジア市場にかけて、対円でのスポット（直物）取引の変動率で、対円で上昇となっていたり、下落が限られている通貨には、韓国、米国、中国、イスラエル、トルコ、スイスなどの各通貨がある。

一方、同期間に対円で下落率が大きい通貨は、メキシコ、ハンガリー、ポーランド、南アフリカ、ユーロ圏、ノルウェー、豪州、NZなどの各通貨となっている。その他の注目点は以下。

<ドル/円、週足の下値抵抗線巡る攻防>

為替相場のドル/円は週足テクニカルで、昨春以降のドルの複数下値抵抗線について、上下動を経ながらも上抜け維持や回復ができるか。完全に下抜けていくかの攻防が続いている。

ブルームバーグのレートによると、前週末10月2日時点における下値抵抗ラインの数値は以下のようにになっている。52週移動平均線157.56円、週足・一目均衡表の転換線156.64円、60週移動平均線156.23円、週足・一目均衡表の雲上限（先行スパン1）155.64円（今週は155.93円）、75週移動平均線154.13円など。

<米FRBの金融政策>

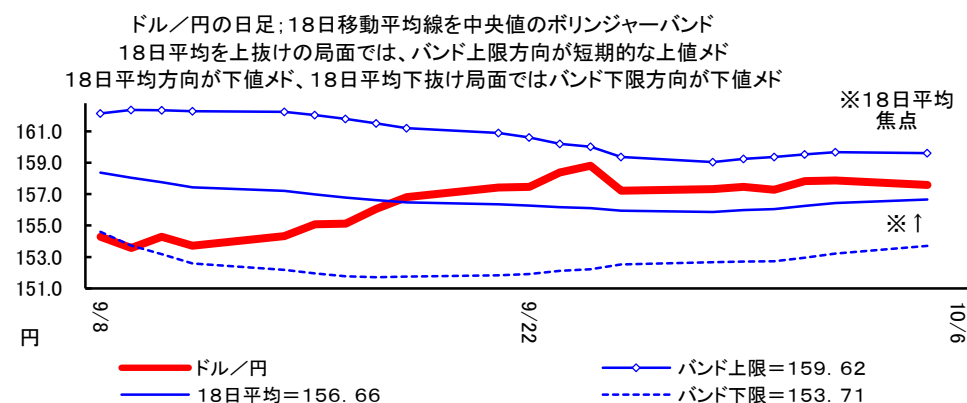
目先の為替相場で注目されるのは、米FRBの金融政策動向だ。前週後半には米国の9月雇用統計が予想を下回り、米先物市場では10月27－28日FOMCでの金利「据え置き」確率が86%になった。1週間前の36%から大きく上昇している。それでも為替相場でドル安は限られており、先行き利上げ余地残存の観測は消えていない。

今週は7日に9月FOMCの議事要旨が公表される（9月15－16日開催）。会合では全会一致で利上げが決定されたほか、現在のFRBは実際の利上げペースは加速させないまでも、FOMCでの議論やFRB幹部の講演などで、「インフレ期待の抑え込み」を強く意識したタカ派メッセージを発信している。今回の議事要旨もインフレ警戒姿勢の強化が注目され、ドル高に振れる可能性がある。

<ECBの金融政策>

欧州市場ではフランスの政治・財政不安により、仏国債の金利上昇（国債価格下落）とユーロ圏の他国国債との金利差（信用格差）拡大が見られている。ECBは先行き危機深化の場合、保有債券縮小の量的引き締め（QT）終了や、仏国債の支援策に迫られる可能性があるなど、今後の政策対応には不透明感も出てきた。

現在のユーロ圏では資源高などにより、インフレが上昇している。その点でECBの利上げ観測自体は、残存となったままだ。一方で現在の仏不安やユーロ圏全体での長期金利上昇、根強い資源エネルギー価格の高止まりなどにより、先行き景気が減速となるリスクもくすぶっている。こうしたユーロ圏の経済減速リスクや、ECB追加利上げの場合の景気下押しリスクは、仏不安とあいまって、対ド



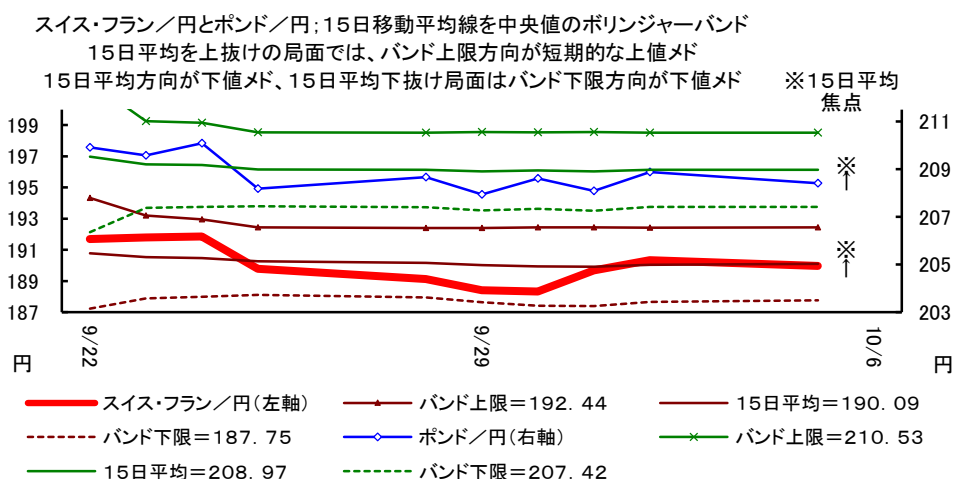
ル、対円でのユーロの戻り売り要因となる可能性もある。

＜日銀の政策と日本の円安対応＞

日銀は物価抑制や円安是正に向けて、利上げペースの加速や利上げ最終水準の引き上げが焦点になっている。今週は6日に日銀の植田和男総裁が全国証券大会で挨拶を行うほか、8日には日銀で支店長会議が開催される。それぞれ利上げ加速を想起させると円高へと作用。反対に過去の利上げの累積効果や長期金利の上昇などにより、微妙に景気の冷却効果が示唆されたり、利上げペースの慎重化につながる材料が出てくると、全般円安につながりやすい。

現在は日米で政治的・政策的に、円安是正協調が強化されている。引き続き急激なスピードでの円安や、1ドル＝160円方向に向かう円安・ドル高局面では、円安牽制発言や日銀の利上げ加速、レートチェック、実弾介入などが注視される。

片山さつき財務相は前週末、TBSとのインタビューで、円安是正での日米首脳レベルでの認識共有や、高市政権内での意思統一を強調した。その反面、製造業からの声として、「米国で関税問題が残るなか、一頃のように『ガンッと円高になったらきつい』という意見もある」と述べている。政策面では急激な円安の抑止と同時に、一気に円高が反転加速されることの回避にも目配りを示していた。



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。